

天草今富地区における暮らしに根ざした景観構造に関する研究

Study on landscape architecture from a view point of lifestyle in Imatomi area, Amakusa

熊本大学工学部社会環境工学科

芥 慎太郎

1. はじめに

天草市河浦町今富地区は重要文化的景観「天草崎津の漁村景観」の拡張2次申請予定地域である。本研究では、地域固有の歴史、自然環境、生活・生業を分析し、地域住民の空間認識を調査することで、今富地区の景観構造把握を目的とする。

2. 今富地区の集落形成プロセスの整理

(1) 対象地の概要

今富地区は熊本県天草下島の南西部、羊角湾に位置する農村である。カクレキリシタンの里であり、遺物や史跡などが多く残存している。

(2) 崎津湾干拓の整理(図1)

1) 干拓以前の今富地区：今富地区の大部分が水面下であった。そのため、山稼ぎを生業とし、稲作はほとんどなく、わずかな陸地で畑作が行われていたことが考えられる。

2) 干拓初期(明治期の干拓)：この時代までに今富地区はほぼ陸地となった。干拓された低湿地では、徐々に稲作が始まり、羊角湾における漁業に加え、農業が生業として成立し始めた時代であると考えられる。

3) 干拓後期(昭和期の干拓)：居住地の拡大を目的とした干拓が多く見られる。また、徐々に交通網の整備も見られるようになった。

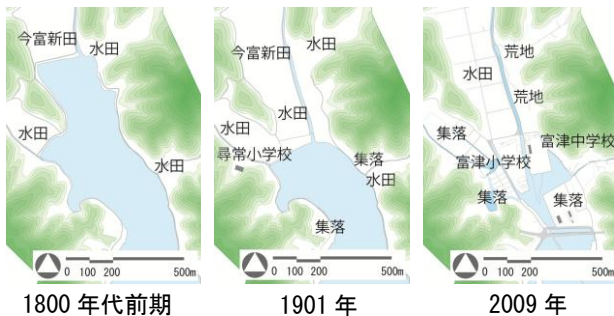


図1 崎津湾の干拓変遷図

3. 農業を基盤とした生活環境構造の把握

土地利用・農業水利に関する現地調査の結果、3集落の農業形態はそれぞれ異なっていることが分かった。そこで、各集落における農村景観の特徴を農地利用に着目して示す。

(1) 西川内集落：地質の関係や河川からの一定した取水が困難なため、家屋間の狭いエリアを利用した畑作中心の景観が広がっている。

(2) 大川内集落：河川からの一定した取水が可能のため、広範囲において水田が広がっている。また、取水口の数も多く複雑な水路網が張り巡らされている。

(3) 志茂集落：中央に広がる今富新田における稲作が特徴的である。一方、1枚の水田を細かい畦で切り、畑と水田を両立させる様子も見られる。

4. 地域住民による空間認識に関する分析

地域住民へのヒアリング結果を基に3集落の境界、イメージ構成要素、地域独特の地名を示す(図2)。

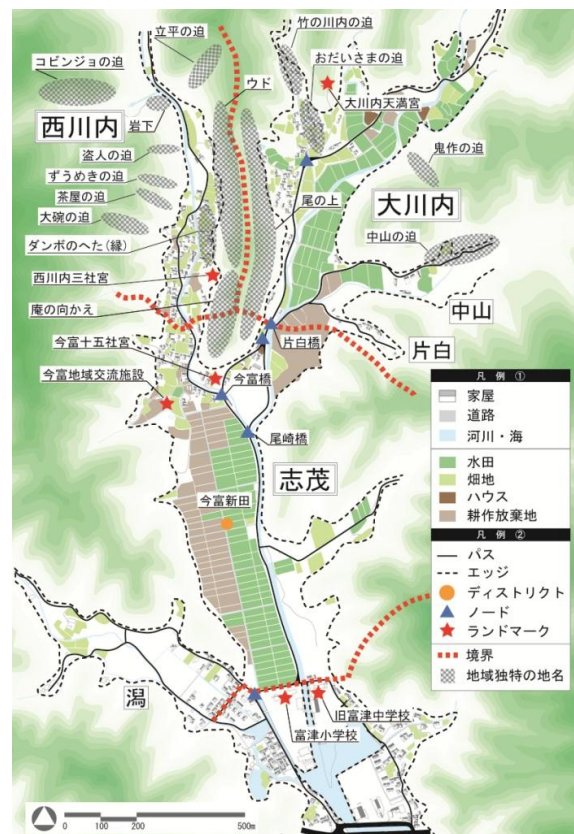


図2 地域住民の景観認識図

今富地区における住民の空間認識について以下に列挙する。

1) 今富地区の住民は地域独特の地名を用いて土地を細かく分けて認識している。

2) 地域独特の地名は迫に関するものが多く、今富地区の住民は景観構造を認識する上で「迫」を一つの単位として捉えている。

3) 今富地区の住民が把握する3集落の境界は聖水取水場、水方屋敷跡と明治以前の海岸線に關係する可能性がある。

5. おわりに

以上のことから、今富地区の住民は宗教的な歴史や地域を取り巻く自然環境、生業である農業に影響を受けた空間認識をしていることが考察された。